

雑談における母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の分析
— 『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』を用いて—
宇佐美まゆみ, 張未未

国立国語研究所『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』では、コーパス収録会話の半数を占める学生話者の母語場面と接触場面の同等の相手との初対面雑談、友人同士の雑談の全 155 会話を「コア会話」と名付けており、大量データの量的分析には「コア会話」を利用することを推奨している。本発表では、宇佐美 (2015) 『『総合的会話分析』の趣旨と方法—量的分析と質的分析の必然的融合—』(『日本語教育』162-0) の方法論に基づき、「コア会話」を利用した特徴分析の一例として、日常会話で頻繁に生じる「笑い」の使用傾向を分析した。グローバルの観点からは、宇佐美 (2020) 「基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019 年改訂版」(『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』) における笑いの文字化方法を生かし、笑いを話者の「①発話時の笑い」と「②相手発話時の笑い」に分けて、「コア会話」の中の母語場面と接触場面の初対面、友人同性同士の会話それぞれの笑いの使用傾向を定量的にまとめた。ローカルの観点からは、早川 (2000) による 3 類 8 種の笑いの分類に倣い、音声つきの母語話者と非母語話者の初対面 8 会話と友人 8 会話における笑いの機能的特徴を定性的に考察した。分析の結果、次の 3 点が明らかになった。①母語場面においては、女性は、初対面会話、友人会話のいずれにおいても同程度に笑うのに対して、男性は、友人との会話において、初対面の会話の 2 倍以上の割合で笑っている。②接触場面では、初対面会話、友人会話、男女を問わず、非母語話者のほうが母語話者より多く笑っており、会話を円滑に進めようとする努力が窺えた。③初対面会話、友人会話においては、母語話者、非母語話者ともに、笑いのタイプは、「A. 談話促進」、「B. 緊張緩和」、「C. 会話継続」の順に多かったが、「C. 会話継続」の笑いは、非母語話者が圧倒的に多かった。総合的に見て、接触場面においては、非母語話者の笑いのほうが多いことが明らかになった。